

近代文体論の方向

山口秀夫

近代文体論の先駆者の名も高い Charles Bally の頃から、文体の記述は文学論にあまり感わされずに言語科学的に行うのが言語学研究者の仕事であった。「文体」(le style, style, der Stil) という語は、その起源も慣用も定かでなく定義し難いことが多い。その派生語「文体的」(stylistique, etc.) も早くは文学的様式に関わるものが多い。言語研究では、文体というものを言語の単なる情報的な機能に附加された装飾的な要素であるとする旧来の交学的見解を避けて、むしろそれをさまざまな状況での言語の用法の中に位置づけ、これを適確に解釈することが問題を明らかにするであろう。

言語用法の分析は、その事実をいくつかの観察相に基いて記述することができる。もし一言語の記述が現行の方法のように、音韻・語彙・文法の段階で行われるとすれば、文体もまた同じ分野での特徴として見ることができよう。S. Ullmann(1964:111)が音韻的文体論・語の文体論・文の文体論を立てたのも、G. Devoto(1950:23)がそれよりも先に、文体論を、音韻論・形態論・統辞論・語彙論と平行する言語表現の研究で、そこには言語の規定性よりは選択(scelta)の可能性が働いていると考えたのもこの事を指している。ほかのところで(1950:35) Devoto は、文体的事実(le situazione espressive 表現的情况)と言語制度との相違を、瞬間性・具体性・個性をもつものと緩やかなリズムで展開する、誰にも齎しく適用されるためには技巧的に図式化されなければならない超人格的なものとの対立に見ている。文体は言語のこの抽象的図式を選択的に用いるものであるから可変的なのである。言語の完全な理解には言語図式と変化との間の諸関係の知識が必要なのである。

すべて可能な変形が言語の図式から生じうる場合には、その規則で説明が出来るから、文法的表現と文体的表現との区別はないであろうが、詩人の創造的表現などでは定まった図式から外れることも多い。文学的言語が通常言語とは異なる技巧で独自の図式を立てるとき言語の図式は複雑なものになる。本文に異なる図式が共存するとき、言語図式の統一だけにかかわっている文法家には困りものだが、文体論者には自家薬籠中のものである。こういうとき、As You Like It の Touchstone の二重言語のように、図式と変形との関係は多様なものになる。この関係を de Saussure の言語理論は la langue と la parole、体系と実践の関係で説いている。これは社会的なものと個人的なもの、本質的なものと二次的なものの区別としても説かれている(1915:36)。また別の最近の理論(N. Chomsky 1965:4)では competence(話し手・聞き手の母語の知識)と performance(具体的状況での実際の言語用法)の区別が根本的なものとして説かれている。この主張によれば、言語の図式もしくは基本構造は言語能力、ここに competence と呼ばれるものとなり、文体の問題の場である言語の個人的用法の研究は performance の問題ということになるであろう。

次に文体論的に重要な言語的特徴の範囲を決めなければならない。分析法が不確実であるとその規準は容易には得られない。文学批評家の場合には、美文・悪文がその最大関心事であるから、規準の決定に評価的であることが多いが、これは好みの問題で、絶対的な根拠は

ない。言語研究者でも直観に頼ることがある。L. Spitzer (1948) のいう principle of the philological circle はその例で、新理念言語学の Croce 風である。その Don Quixote 論ではこの流儀で polyonomasia をきわ立った文体的特徴として抽出している。

上には一般に定まった図式のことを言ったが、これは文体論そのほかの分野の変異を示す標準 (la norme, norm) が立てられることを指すものであるが、この点、普通言語と文学的言語とは違いがあって、前者では標準に外れたものは誤りと見なされ、後者ではむしろそれが特徴である。この二種の図式は混同してはならない。合理的な言語分析法ではこのような逸脱は個々の作品・作者にだけ有意な詩的文法を立てて説明することになるであろう。文脈関係の中で逸脱は目立つ特徴と目立たない特徴が対照的に現われるであろう。ある行文の文体を測定するのに、異なる段階の言語事項の頻度を、標準と見做される、文脈的に明確な関係のあるほかの本文に見られる類似の特徴と比較を試みようとする N. E. Enkvist (1964:29) にも norm の考えが見られる。ここに出てくる統計の問題は暫く措くとして、標準の論にも問題がある。

標準は必しも明確に定められない。一定性のない文体というものは何かほかの一定性を欠くもので説明するほかはない。逸脱が逸脱とされるのは主観的に予期された言語標準に照らしている場合が多い。これは母国語の話し手の知識に頼るほかはない。W. Sanders が、'Erwartungsnorm' と呼ぶもので、このような通常の文体標準よりは、言語的・文法的に逸脱を解釈すべきであるというのがその主張 (1973:31) である。厳密に言語的な標準の解釈は近代言語学の基本的な方位である。文体研究もこの考えにある点まで掘ってよいであろう。

合文法性とか好形式の標準とかいうことが最近の文法理論では論じられているが、文体の問題でも Enkvist (1973) は、言語用法に文体的効果を生ずる逸脱の 2 類型に注意している。一つは好形式の普通の標準からのもの、他は文脈的に定義できる標準、従って他の文体からのものである (ibid.:98)。前者は文学作品、殊に近代詩によく見られるもので、非文法性が却って文体的価値となっている。

話し言葉の文体に逸脱のさまざまな類型があることは近代文法理論に知られている (N. Chomsky 1965:148, N. E. Enkvist 1973:98)。Crystal-Davy (1969:125 ff.) も口頭論評の言語の特徴が制限のないものであることを論じているが、ここには図式と変化の日常的な関係が見られる。

他方、種々の文体は文脈的に定義できる。文脈もしくは脈絡は近代用法ではひろく言語的にも非言語的にも用いられる。Slama-Cazacu (1972) は言語的な le contexte intraverbal と情動的な le contexte extraverbal を区別する。J. R. Firth の情況理論 context of situation (1968:177) も、言語行為者の言語行動と非言語行動のほかに、関連事象と非言語的・非個人的事件、言語行動の効果を情況 (脈絡) の中に入れている。ここに説かれる脈絡の全体系には言語的交通手段、言語行為者、交通の行われる事情、言い換えると言語行為の主要要素が含まれている。

言語交通もしくは言語行動の手段は言と文字とで、文体の問題はこの 2 分野に跨っている。文体論の歴史ではここにもいろいろの議論が知られている。Ch. Bally は langue, la langue, la parole の 3 段階の文体論の可能性を論じて、文体論は母国語から、それも話し言葉の最も自然な形から始めるほかはないといっている (1936²:I.20)。言語

事実の表現体系の研究の場を個人文体論に見出してその主題としての話し言葉に強調を置くのである。しかし一言語集団の成員の言語用法と詩人または小説家の用法との間には越え難い溝があるとしている。文学者はその言語を意図的・意識的に用いるからである。

この考え方は文学批評家がその研究を文学作品の文体、とりわけ文学最高の特性としての文体に限っているのとは相反している。最近ではむしろ文学的文体は文体論の範囲にも入り、通常言語の文体論原理に反すると考えられてもいない。ただ機能論的に異なる類型の文体の問題がある。W. Sanders (1973:41) は隔り (Distanziertheit) と自然 (Spontaneität) の両極を書き言葉と話し言葉の対立に見ている。文学者は用意された正文を複製し、通常の話し手は拘束されない自然の気分に従う。文脈の構成要素としての言語行為者のうち、話し手だけが主役の言形式は日常交通ではあまり重要な位置を占めないが、文学作品では劇的独白 (Hamletの独白など) のように文体的に重要なことがある。対話の方は一層普通で、散文作家も読者に語り掛けているものとされる。S. Augustinus の Soliloquiaeにも Ratio と Anima の対話がある。

言語用法と情況との相互関係も古くから言われていることである。W. Sandersが(1973:47) 'Situationsstil' を説くのも、言語の異体とその生れる言語外情況との密接な関係を近代文体論者が認めている例である。またCrystal-Davy (1969:11) も言語と言語外脈絡との相関関係の重要性を強調し、限られた社会的脈絡だけに現われる特徴を文体的に重要なもしくは文体的差別の特徴と呼んでその。G.W. Turner (1973:26) も同様に、文体論上の説明は言語の事情、言語使用の状況を調べることで決まるといっている。ことばに変異があることはそのどの特徴をとっても言えることであるが、この言語的変異は言語構造論からいうと、言語体系に内在する「言語事実の基本的な系合 (Paradigma) 関係」を証するものとして説明されている。それは統合 (Syntagma) 的連続関係と区別される。われわれの言語知識と言語使用を competence と performance の言語模型で説明しようとする最近の文法理論はこの原理を適用して文体的変異を言語の基礎構造から引き出すとしている。

文の基礎構造と話し手によって生み出された文との間に正しい関係が成り立つと、それは合文法性と呼ばれる。文には文法的であっても意味が異常のものもあるし、文法性が低くても聞き手に通ずるものもある。後者は一層文法的な文と関連させることが出来れば正常文のいい替えとされる。このような立場からはこの異類の文にそれぞれ文体上の問題がある。最近の論者は話し手・筆者の文体的直観を肯定して Chomsky 理論を敷衍し、文体的能力 (stylistic competence) の考え方を支持している (W. Sanders, 113)。話される文また書かれる文はこの直観の言語的実現すなわち表層構造と見るのである。この議論はまだ完成されていない。言語の全過程のどこで文体の問題が起るのか意見は分れている。基本構造のさまざまな実現形式から選択をする段階で起るのか、それとも既に言語に内在する直観として存在し、そこから多様な言形式が選択の過程を通して生ずるのか。いずれにしても、言語行為過程の最終段階は文体では選択である。それで Devoto には 'scelta' の論があり、Ullmann も "Or, qui dit style dit choix" (1959:45) といっている。N.E. Enkvist は文体を選択の問題と考えるならば、選択には文法的、非文法的、文体的の別を立てるべきであるといっている。

文体は究局的には言語用法の問題で、言語の変異とそれが生ずる文脈との関係によって定まるものである。話し手また筆者はこのような関係を選択し、標準語法に従うもよく、それ

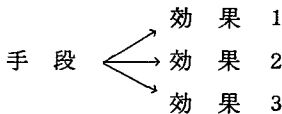
から逸れて自己流の表現をしてもよい。この意味の選択は行為過程である。

それ故、文体構造の記述は言語的特徴を言語的なまた言語外脈絡のいろいろの面と関連して研究することになる。言語内の文体的特徴は文法構造の形式層または意味層で、換言すれば音韻層・語彙層・統辞層で記述するのが通例である。M. Riffaterre (1959:171) は文体の規準として標準 (norm) の代りに文脈的な定義を示している。文脈を変える要素はみな文体的効果を生ずる。後の文体論でも (1971) この考えを敷衍して 'microcontexte' と 'macrocontexte' の別を立てている。これは「文体的過程内部の文脈と文体的過程外部の文脈の区別」、すなわち文体的過程の対立を創り出す文脈とこの対立を或いは強め或いは弱めて変容する文脈との区別であるという (1971:67)。Milton 的表現 'darkness visible' (P.L. I. 63) は期待される普通の言語律から逸れているための反語的対立である。

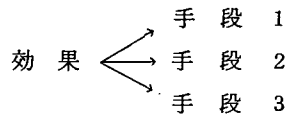
小文脈に対する大文脈 (macrocontext) は文体的過程に先行し、その外にある文面の中で、普通に行われている定義に近い。この大文脈は文体的過程の後に立ち返ってくることもあり、新しい文体的過程が連続してその後続くこともある。

文体的特徴を論ずるとき、言語手段がどのような効果を齎らすかということは文学の問題である。まずこの関係は多様であって、文体的手段は従って多義的になり、多角的な解釈が可能になることが知られている。S. Ullmann (1973:81, 85) は、言語記述には外形だけでなく内部的意味も重視すべきであるという観点から、文体の研究にも外面から内部へ、内部から外面への二つの道があることを説いている。文体的手段から始めてその生み出す文学的また心理的効力に及んでもよく、始めにある価値の主題、均勢とか対照とか、を設けてそのような効果を挙げるのにどのような手段を文学作品では用いるかを見てもよい。いまその適例を挙げる余白がここにはないが、そのような文体への接近の仕方を Ullmann は次のような図式で表わしている (1973:85)。

方法 I



方法 II



文体論者はその実証の多くを語彙・統辞論の分野に求めるが、文学的文体研究は常に文の枠を越えた所にも関心をもっていた。言語学的文体論もその収獲を一層広い言語領域、話法 (le discours, discourse) から刈取るべきである。しかし G.W. Turner (1973:104) は両派の間に限界を置く必要があるという。文学的な興味の的となる文学構成法よりは小幅な言語領域で精密に文体研究を行うことができるからである。最近のドイツ学派では一層野心的に行文文体 ('Textstilistik') が唱えられる。これは新しい行文言語学 ('Textlinguistik) からの派生である。

言語的特徴と結合した文体的選択の可能性にはいくつかの段階があって、音韻から語、文へ更に行文 (text) へと、その限界は次第に広げられ自由に明確な文体表現が行われる。行文という概念はまだ十分明確にされていないが、文の連続はよく結合している場合と、関連のない単なる配列に過ぎないものがある。A. Pope の名句 'To err is human, to

forgive divine' は文法的連結手段を用いていないが、内面的構造の対照によって連続している。芭蕉嗟峨日記から例を取れば、元禄四年四月十九日の条に、「午半、臨川寺に詣。大井川前に流れぬ嵐山右に高く、松の尾里につゞけり。虚空蔵に詣ル人往かひ多し。」と出ている。この例でも数箇の文は内面的関係によって呼応し、緊密な連結が生じている。このような指示詞とか呼応とかが文面の文体的性格を定めるよすがとなるわけである。この研究分野は文から文段へ、節へ、さらに大きな話文へと広げて行くことができる。

転じて文体記述における脈絡の言語外の段階に移るとすれば、問題はここでは可変的な言語形式と可変的な情況様式との関係で、その難しさはこれが一般的に予想できないところにある。両者の間には的確な1対1の対応関係がない。

文体の情况的な拘束を規定するのに用いられる現行用語の一つはロンドン学派のいわゆる 'register' (言語使用域)である。異なる事情では言語の異なる 'register' が用いられるという。言語行為者相互の関係(話法の文体)、主題(話法の場)、本文の言語手段(筆記文と話語)などで異なるわけである(Robert W. M. Dixon, 1965:94)。重なり合う情況の中で一定要素としての話し手はある情況へその言語を合わせて行くのであるが、その文体記述の言語外次元にはさまざまなものが考えられる。Turnerは(1973:165f.)文体変化の範囲を(1)専門(話し手の社会的役割)、(2)形式(公式・非公式)、(3)聞え(話し手と聞き手の距離)、その他都市的・地方的なことば遣いなどに見ている。この register という用語はしかし時としてさまざまに用いられることもある。同様に Crystal-Davy (1969:61)は言語的特徴と情況の機能との相関性によって文体分析をしているが、ここでは情况的拘束の次元を次のように分類している:A.個人、方言、時間、B.話法(手段と言語行為関与)、C.領域(Turnerの専門というのに近い)、社会的地位、様式(中世のいわゆる dictamen とか、文学批評にいうジャンルなど)、特性。古く J. Whatmoughなどは「科学的」と「詩的」(S & P)の話法2分論を説いている(1956)。

「特性」というのは個人の言語用法の特異性を指すのであるが、ここで古くからの問題である個性と個人的文体、Buffonのいう 'Le style est l'homme même' に立ち帰ることになる。小林英夫教授の「文体論建設」がこの主題から出発していることを私たちは知っているが、教授は後さらに個人の美的活動としての言語を説いたB. Croce, K. Voszler, E. Lerch などから歩を進めて美学的文体論の体系(「美学的文体論」そのほか多くの著書)を築かれている。

S. Ullmannは特定の言語使用域もしくは情况的次元と連合する語の喚起力('evocative power')に注意を向けて、その主要次元として場('field'), 様式('mode'), 音程('tenor')を選んで(1973:52)、これはJ. Spencer-M. Gregory(1964)の提唱したもので、ほぼCrystal-Davyの領域、手段、地位に相当するものであるという。

個人的文体に関するBuffonの格言は大詩人への言及であって、通常人についていっているのではないが、文体は万人に共通する言語問題である。ただ個人の特異点となる言語的特徴は果して何であるかは容易にはいい難い、もじり(la parodie, parody)は大作家の卓抜な語法が人に覚えられて、その特異点として模倣されることである。しかしこの場合にも個人作家特有の語法の特徴というものは明確には捕え得ないことがある。いく度も模倣されたHamlet劇の独白中の'To be, or not to be—that is the question'も先例がない訳ではなく、同代の詩人Chr. Marlowe, Doctor Faustus, 40に 'Bid ὁὐ καὶ μὴ ὁὐ farewell' という句が見えるから、これは当時知識人の口にしばし

ば上った哲学的命題であったろう。

文体の個性はしばしば戯れになぞられるが、幻のように捕え難い。それでこれを客観化するために統計の方法が取られるのであるが、ありふれた語でもその頻出は多くの事を語るとはいえ、時折言われるように、何を数えればよいのか決め兼ねることが多い。統計が数字だけに終ることもなくはない。John B. Carroll (Sebeok, 1960:283-92) のように綿密な統計の方法もあり、George A. Millerのような弁護 (Sebeok, 1960:392) も聞かれ、統計的研究と直観的研究の共存 (同処 395) に望みが掛けられたが、R. A. Sayce (1962) の感じたような「純粋な統計に文体研究を基礎づけようとする勇敢な試み」への驚きは今も消えないであろう。しかし Ch. Muller (1968:191f.) にはなお頻出度の重要性と文体的意義が説かれている。

心理的な、純粋に直観的な方法も限界があるが、文学的想像に依拠する文体類型論も中世の簡素、華麗、壮嚴文体などの跡を曳くものであることが多い。G. Matoré (1953:68) は一社会を表現するような語彙の単位を基調語 (mot-clé) と名付ける、と定義しているが、これも近代文体論に援用される方法の一つで、社会がその理想を認めるだけ生命をもつ感情、観念を示すと説かれる。Matoré は Montaigne 時代の le prud'homme, l'honnête homme とか、le philosophe とかの例を挙げている。K. C. Phillipps (1970:55) は Jane Austen の作品中にその好みの語 'rational' の軌跡を迎っているが、Shakespeare の *Tempest* では形容詞 'gentle' とその同類の反復出現を劇の解釈に有意味と見ることができよう。

個人的文体の変異性は話し手・書き手の特異性にもよることがあるが、その選択はほかの事情によっても定まる。伝統的な詩文体、標準体、口語体などの別はその差が段階的で、決定的ではない。W. Labov (1966) は言語と社会的状況との相関性を詳細に追求したが、話し手が公式から非公式に移るとき話法の文体に変化が起ることを立証している。しかし Basil Bernstein (1971 reprint) が社会階級と言語能力との関係の重要性を力説したとき、その主張の真実性の乏しさが批評的となった (Peter Trudgill, 1975:147-151)。

文体はまた伝達的手段としての言語の合目的性の観点からも考察されている。上述のような状況の変化ということのほかには言語使用者が慣習的な言語材料の中から目的に適った手段を選び取るということがある。言語手段の用途のこの局面に特に関心を示すのはプラグ (Prague) 派の学者達で、これを言行為の機能的分化として説いている。B. Havránek (Garvin, 1964:3ff.) は標準語の4種の機能を次のように認める：伝達の機能 (1. 伝達, 2. 通常専門的, 3. 理論専門的) および 4. 美的機能。これらの機能から得られる標準語の機能的文体は言語的反応の特定目的に従って次の5種であるという：

1. 普通の伝達、情報
2. 励まし (訴え)、説得
3. 一般的説明 (通俗)
4. 専門的説明 (解説、証明)
5. 成文化

また言語的反応の仕方によれば、私的と公的、口頭と筆記とがある。

- 口頭
1. 私的：(独白) — 対話
 2. 公的：演説 — 討論

筆記 1. 私的

2. 公的：(a) 揭示, ポスター
- (b) 新聞報道
- (c) 著述(雑誌記事)

Havránek の体系は R. Jakobson が言行為の主要要因に付与した一組の言語機能 (Sebeok, 1960: 350-377) を基にした体系に類似している。これは K. Bühler (1935) の言語機能論を敷衍したものであるが、6 要因 addresser (話し手), message (詞) addressee (聞き手), context (脈絡), contact (交通), code (記号体系) に emotive (または "expressive"), poetic, conative, referential, phatic, metalinguistic の 6 機能がそれぞれ集中的に働くと言く。'Phatic' (ことばによる交通が一集団の人々を社会的行動に結束させる働き) は Malinowski の考えである。Metalinguistic は対象言語を注解する機能である。Enkvist (1973: 58-9) はこの機能的文体論 (Functional Stylistics) が function の語を乱用することのあるのを非難しているが、K. Horálek (1965) は Jakobson の見解に沿って文体論を立てることの利益を説いている。

M. A. K. Halliday は文体の研究に占める意味論の位地を強調し、これはやがて言語の「機能論」を考えることになるかといっているが、これは意味の理論のことである。

次に文体論と実用論 (Pragmatics) との関係はなお論議中のものである。Charles Morris (1946) が人間の記号行動の学としての意味論 (Semiotic) を興し、それに pragmatics, semantics, syntactics の 3 部門を立ててから、この分野が開拓されているが、文体論との共通問題はまだ十分明らかではない。ただ伝承の修辞学は性格的に実用文体論の趣きがあることが指摘されている。Morris と同じ頃に発表された J. L. Austin の言行為論 (新版 1962) では、言語による人間の行動について今まで見落された面を明らかにしている。その言語の実行理論 (Performative Theory) は言行為の変化の諸類型を明らかにする限りで文体論にも資するところであろう。「私は信ずる」というのは自分の心情を告げているので 'constative' (確言) という。これとは別に 'performative' (実行) と呼ぶべき言行為がある。「ご助力感謝します」といえば、言いながら一つの行為を行っているわけである。これを単に物をいう行為 locutionary と区別する。物をいうことが即ち行為となっている場合は多いが、「私は神を信ずる」が illocutionary であるに対して、「彼は神を信じている」というときはその真実性には確証がない。主観的にいわれているだけである。物をいうときに聞き手・話し手・そのほかの人々の心に思いに行いにある結果を齎らすことがある。Austin はこのような言動の実行を perlocutionary と呼んでいる。R. Ohmann (1972) も言語行為によって果される実行 (illocutionary act) の表現の文体論によって実行文体論が成立するであろうという。例えば命令は実行動詞 (performative verbs) によっても動詞命令形によっても情況次第で表現できるのである。

なお古くからあってまた新しく論ぜられている問題の一つは言語に外面的に表われない内示的表現の問題 (l'implicite, implicite) である。古くは O. Jespersen (1968 reprint, 309) にも言語機能として expression, impression, suppression の説がある。E. Benveniste (1966: 259) は言語には話し手が自分を主体として構える事実がある (話しながら「私は」という) ことを指摘して、内示的表現はそのことから説

明できるという。O. Ducrot (1972) は言語的禁忌のあること、対話者が矛盾したことを言わないようにする心のあることを言語表現抑止の理由としている。この Ducrot が内示 (l'implicite) と呼んでいる過程に、(1) 言うべき内容が抑えられている場合 (l'implicite de l'énoncé) と (2) 言われたことをもとにした内示 (sous entendu いわずとも分ること) の二つが挙げられている。この内示的意味はいわば字義に付加されたものである。字義の内部に内示的なものが付加されるところに最近の意味論・文法論にいう予想 (presupposition) の概念の主要性があると Ducrot (1972:24) はいう。この問題はここでは立入らないが、その文体的効用のある場合は Ducrot (14ff.) が文体的操作 (les manoeuvres stylistiques) と呼んでいるものにも見られる。Othello, III. III の Iago は Cassio を正直者 ('honest') と呼びながら、その言葉は次第に不正直者と思わせるような口吻になる。

文体研究の方向は言語的特徴の定義から進んで言語行為全体の吟味にまで入って行かなければならないようである。

参 考 文 献

- J. L. Austin, *How to Do Things with Words*, London: O. U. P., 1962.
 Charles Bally, *Traité de stylistique française*. Heidelberg, 1936 (réimpression).
 Basil Bernstein, *Class, Codes and Control*. St Albans, Herts., 1973 (1971).
 Karl Bühler, *Sprachtheorie*. Jena, 1934.
 N. Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass., 1965.
 ……………, *Language and Mind*. New York, 1972 (1968).
 David Crystal and Derek Davy, *Investigating Style*. London, 1969.
 Giacomo Devoto, *Studi di stilistica*. Firenze, 1950.
 Robert M. W. Dixon, *What Is Language? A New Approach to Linguistic Description*. London, 1965.
 Nils Erik Enkvist, *Linguistic Stylistics*. The Hague/Paris, 1973.
 J. R. Firth, *Selected Papers of, 1952-59*. Edited by F. R. Palmer. London, 1968.
 Paul L. Garvin (ed.), *A Prague School Reader on Esthetics, Literary Structure, and Style*. Washington, D. C., 1964.
 M. A. K. Halliday, *Explorations in the Functions of Language*. London, 1973.
 Karel Horálek, "Sprachfunktion und funktionelle Stilistik", in *Linguistics* 14, May 1965, 14-22.
 Román Jakobson, "Linguistics and Poetics", in Sebeok, *Style in Language*, 1960, 350-77.
 ……………, *Questions de poétique*. Paris, 1973.

- O. Jespersen, *The Philosophy of Language*. London, 1968 (1924).
- Kobayashi, Hideo, *Bigakuteki Buntairon*. Tokyo, 1968.
- William Labov, *The Social Stratification of English in New York City*. Washington: Center for Applied Linguistics, 1966.
- Georges Matoré, *La Méthode en lexicologie. Domaine française*. Paris, 1968.
- Charles Morris, *Signs, Language and Behaviour*. New York, 1950⁴.
- Charles Muller, *Initiation à la statistique linguistique*. Paris, 1968.
- Richard Ohmann, "Generative Grammars and the Concept of Literary Style", in *Word* 20, 1964, 423-39.
- K. C. Phillipps, *Jane Austen's English*. London, 1970.
- Michael Riffaterre, "Criteria for Style Analysis", in *Word* 15. 1, 1959, 154-74.
-, *Essais de stylistique structurale*. Paris, 1971.
- F. de Saussure, *Cours de linguistique générale*. Paris, 1960 (1915).
Edition critique par Tullio de Mauro, Paris, 1972.
- Willy Sanders, *Linguistische Stiltheorie*. Göttingen, 1973.
- R. A. Sayce, *Style in French Prose*. Oxford, 1958.
-, Review article on Sebeok, *Style in Language*, in *Archivum Linguisticum*, 4.1, 1962, 77-83.
- T. A. Sebeok (ed.), *Style in Language*. New York, 1960.
- T. Slama-Cazacu, *La Psycholinguistique*. Paris, 1972.
- John Spencer (ed.), *Linguistics and Style*. London: O. U. P., 1964.
- Leo Spitzer, *Linguistics and Literary History*. Princeton University Press, 1948.
- Peter Trudgill, Review of Basil Bernstein, *Class, Codes and Control*, 1973, in *Journal of Linguistics*, 11.1, March 1975, 147-151.
- G. W. Turner, *Stylistics*. Harmondsworth, 1973.
- Stephen Ullmann, *Style in the French Novel*. O. U. P., 1957.
-, *The Image in the Modern French Novel*. O. U. P., 1960.
-, *Language and Style*. Oxford, 1964.
-, *Meaning and Style*. Oxford, 1973.
- Joshua Whatmough, *Poetic, Scientific and Other Forms of Discourse. A New Approach to Greek and Latin Literature*. University of California Press, 1956.

文 献 補 遺

Emile Benveniste, Problèmes de linguistique générale. Paris, 1966.

Oswald Ducrot, Dire et ne dire. Principe de sémantique linguistique.
Paris, 1972.

Yamaguchi, Hideo, Essays towards English Semantics. Tokyo,
1961, 1969².